

THE DORES DEN DOLLS

ピアノとドラムが情念的に絡み合い
美しくも狂おしい音楽を奏でる異色の男女デュオ
ザ・ドレステン・ドールズ

ピアノとドラムによるデュオ、ザ・ドレステン・ドールズが顔出し出す。原初的なロックの鬼気迫る緊迫感と、西洋的な退廃美は、正にファンタスティックなライブ感の賜物。彼等の2ndアルバム「イエス・ヴァージニア」(ロードランナー)は固らずともそれを証明している。東洋の精神性にも通じているアマング・バーマーのストレートな感情表現は、自らの指先と声帯の両方に強い音符の連打を与えていく。ブライアン・ヴィグリオネの積舌なドラミングは、曲の間取りを心得ているかのように芯においては寡黙。そんな2人が寄り添った時、一気に音楽という物語は広がり、美しさは混沌へ、混沌は美しさへと飛翔していく。2人が語る、制作のユニークな空気が生み出すマジックとは?

フジ・ロック・フェスティバル'05では今作をプロデュースしたショーン・スレイド(&ポール・Q・コルデリーでレディオヘッド、ピクシーズなどを手がける)も同行したそうですが、

ブライアン: 2年半ぐらい前からレコーディングしていたんだけど、友情を深める意味もあって、一緒に来日してもらったんだ。

アマング: 曲作りに関して言うと、今回のアルバム用に新しく書いたのは2曲だけなの。それ以外はブライアンと出会う前のもとかを引っ張ってきたんだけど、私にとって曲を作るのって、自分の中に入って行くことで、ピアノに向かって集中しないとダメなの。でも次からはもっと違った方法もとってみようとは思っているわ。

アマングは禅やヨガに傾倒しているとのことですが、瞑想の時間から曲が生まれることはあるのですか。

アマング: 初めてそういう質問をされたけど、実際にあったわ(笑)。実は年に1回、田舎に行って1週間から10日位瞑想の時間を過ごすんだけど、その間は何かを書いたり、読んだりすることも禁止されるの。でも5、6日ぐらい経ったあたりから、瞑想しながら森を歩いていたら今回のアルバムに入っている「ディライラ」のアイデアが浮かんできて…。一方では書いてはいけないという思いがあって、物凄く葛藤があったんだけど、結局は内緒で自分の車の中に隠れながら歌詞を書いてしまったわ。曲自体は3コードでシンプルなものだけど、だから自分の中では覚えていられることができたの。曲の生まれ方もユニークだったけど、自分にとってはピアノに向かうことなく書いた初めての曲になったわ。

心がゼロの状態に曲が降ってきた感じだったのですか。

アマング: 私の場合、完全な無の状態こそいいアイデアが浮かぶものなの。ピアノに向かって書く時もそうよ。だからツアーの時に出てくることはないわ。些細なことで気が散ってしまうから、

レコーディングはニューヨークの郊外にあるスタジオで行われたそうですが、どのような環境だったのですか。

ブライアン: 郊外というよりも田舎と言った方がいいような場所でやったんだけど、1920年代ぐらいに建てられた建物をスタジオに改装したところだった。建物は古く、でも設備は最新のものが揃っていて、そのバランス感のようなものによってとても心地よく作業することができたよ。喧嘩とは無縁の場所で集中できたという意味でもね。

アマング: レコーディングの時って、曲作りとは違って都会のエネルギーを感じてやる方が私にとってはいい感じなの。だから今回は最初のうちは居心地が悪くて、車を飛ばして街に行っていた感じだったわ(笑)。

居心地の良さ悪さがそんなにハッキリしているとは意外です。サウンドからはスタジオで一緒に音を出しながら1+1以上ものを音像化させている一体感が感じられたので。

アマング: そのスタジオまで赴いてレコーディングをしたのも、あなたが言うような感じを出したかったのが目的だったから。1年前からプロデューサーとも、ドレステン・ドールズのライブ感覚を出せるような作品にしたいって相談していて、ピアノのペダルから漏れる音も衝動のままに叫んだ声もすべてライブ的な瞬間として入れていったの。

瞬間の心の動きみたいなもの封じ込めようとしていたのですか。

アマング: 結果的にそうだったって感じだわ。私とブライアンとがある一点を見つめながら集中していくと、そこには魔法のような瞬間が訪れるの。なるべく1テイクで録るようにしたんだけど、そこでは間違いもアリだったわ。完璧な歌ではないかもしれないけど、魔法のような瞬間は何物にも代え難いから。

レコーディング時、アマングはグランド・ピアノを弾いていたのですか。

アマング: 1stアルバム(「ザ・ドレステン・ドールズ」)の時は全曲グランド・ピアノで録ったんだけど、今回はショーンのアイデアもあって最初、キーボードを使ったの。その後グランド・ピアノも使

ってオーヴァーダブしてみたんだけど、試しに全曲オーヴァーダブしたらグランド・ピアノの主張が私達の世界観に合っているというのが見えたので、殆どのキーボード部分を外してしまったわ。

ピアノはスタジオのものを?

アマング: 私のヤマハのピアノがメインで、実は自宅からクレーンを使って運んできたの(笑)。あと「マンディ・ゴーズ・トゥ・メッド・スクール」と「ミー&ザ・ミニバー」ではスタジオにあった100年ぐらい前のスタインウェイを使ったわ。

ピアノの強弱の幅広さが、シンプルな構成のバンドに大きな音の広がりを与えているように思えました。

アマング: ドラムも強弱が大きいんだけど、その2つが一体になると無限の音の出し方ができるの。だからこそピアノとドラムというシンプルな構成にしているというわけ。

ブライアン: 呼吸できるような空間を与えていかないとドレステン・ドールズの曲は成り立たないんだよ。時に、ない部分を補おうとオーヴァープレイしたくなる瞬間もあるんだけど、そこは引く勇気をもって曲の呼吸を優先させている。

歌詞はどのように作っていくのですか。

アマング: サウンドでも歌詞でも一番いい作り方は、自分の中から出て来たものを編集しないことだと思う。私は以前、ふと思いついたことをそのままテープレコーダーに収めては曲作りのきっかけにしていたんだけど、後から聴きながら「自分は何を言いたかったんだろう」と自問自答していくと自然とメロディも歌詞も生まれてくるの。自分を揺さぶらないということも大切ね。それは理想に近いと思うんだけど、あともうひとつ、混乱の中で自分が言いたいことを見つけていくのも私にとってはいい方法なの。

「ミス・オー」ではホロコーストの存在を信じない老女というキャラクターが設定されていますが、三人称であるキャラクターの役割とは?

アマング: 時々フィクションを作ったりもしているんだけど、どのキャラクターも夢を見ているような感じがして、あまり理解はしていないんだけど、それが夢を見ている感じに繋がっているんだと思う。「自分」と歌っていても「あなた」と歌っていても、最終的には自分に選んでくる訳だけど、使い分けはサウンド的な部分に因るところがあるわ。

ハート、戦闘機、矢、万年筆が交わっているアルバム・ジャケットは自身の手によるものなのですか?

アマング: バンドのロゴを作るような感じで、2人でアイデアを出し合ったものなの。バンド・サウンドと同じで、出来るだけシンプルで、かつインパクトの強いものを、と考えていたらこういう感じになったというわけ。

この4要素でアルバム全体の世界を表しているのですか。

アマング: 伝えたいことがそこにはすべて入っているの。例えば、戦争は理性を破壊してしまうとかね。最初はハートの中に、ドラムスティックや剣や時計など、いろいろ入れてみたんだけど、一番分かり易い形にすると、これが一番ということなの。

ライブ感が割き出しの「イエス・ヴァージニア」ですが、ライブでどうなるかという期待を持たせる作品です。

アマング: ドレステン・ドールズを経験するという事は、ライブを見て初めて完結すると思うの。だからアルバムを聴いてくれた人達には是非観てもらいたいわ。(安部 薫)

